

2016 年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞受賞

SNS といじめ～現代のネットいじめとは～

法学部1年 石川 武利

SNS といじめ～現代のネットいじめとは～

はじめに

近年浮上してきた SNS というコミュニケーションツールは、現代の若者たちの間で広く普及している。平成 27 年度版情報通信白書によれば、20 代以下の SNS 利用率は、LINE (62.8%)、Facebook (49.3%)、Twitter (52.8%) となっており、彼らにとって、SNS は必要不可欠なコミュニケーションツールである。一方で、「LINE いじめ」「既読無視問題」「SNS 疲れ」など SNS を介した人間関係問題も近年話題になっており、SNS といじめの関係は注目を浴びている。

では、実際に SNS といじめの間に関連性があるのだろうか。SNS がいじめを助長させていると言えることができるのだろうか。

類似した研究はいくつか行われてきた。たとえば、岡田朋之氏は「ネットいじめはなぜ「痛い」のか」(2011)において、従来のいじめはスクールカースト上位者が下位者をいじめるといった構造だったが、ネットでは加害者が特定されにくいために下位者が上位者をいじめるといった事態が生じていると述べている。また、原清治氏は同書において、ネットいじめは誰が自分をいじているのか分からず、被害者の人間不信を煽る性質があると述べている。しかし、これらの研究は、プロフにおける誹謗中傷、学校裏サイトでの悪質な書き込み、なりすまし等、インターネットの匿名性が問題となっている事例を主に取り扱っている。一方、平成 27 年度版情報通信白書によると、SNS における実名利用率(全利用者数に対する実名利用者数)は、LINE (62.8%)、Facebook (84.8%)、Twitter (23.5%) となっており、SNS は比較的匿名性が低いと言えよう。したがって、先行研究をそのまま「SNS といじめ」問題に適用することは出来ない。このことから、従来のネットいじめ論が現代のいじめにどれほど適応されるかを吟味し、SNS といじめの特徴を今一度見直すことで、新たな「SNS といじめ論」という、より実社会に寄り添った議論をすることができるだろう。

以上から本稿では、SNS を「匿名性の低いインターネット上のコミュニケーションツール」として取り扱い、1 章では SNS といじめの関連性を、2 章では学校現場における SNS といじめの実際的な結びつきを明らかにしていく。

第 1 章 SNS といじめの関連性

先述したように、かつてのインターネットコミュニケーションは、学校裏サイト、2ch などの匿名掲示板などが主であった。すなわち、画面の向こうにいる相手は誰か分からない、不特定多数とのやりとりである。したがって、リアルとバーチャルの世界の間には多少隔たりがあるといえよう。かつては、この隔たりがネットいじめを生んでいたのである。一方、現在のインターネットコミュニケーションは LINE、Twitter、Facebook などの SNS が主である。

三好達也氏によれば、子供たちはリアルとバーチャルをうまく使い分け、よりリアルな世界での絆を深めようとしており、SNSをつかって現実での確かなつながりを担保しようとしているのだ。（「ネットいじめはなぜ「痛い」のか」（2011）、第5章）。彼らにとって、バーチャルな世界はリアルな世界の一部なのだ。ゆえに、家においてもバーチャル上でのリアルな人間関係がつづくため、必然的に不和が生じる機会が増えると考えられる。

次は、SNSがもたらす心理的影響に着目したい。鈴木謙介の「ウェブ社会のゆくえ」（2013）によれば、TwitterやFacebookなどにおいて、トップページに表示されるのは、「今日は〇〇とディズニーランドに行った！」「〇〇さんが××さんの投稿にいいね！を付けました」などの他人の投稿である。このような自分とは無関係に盛り上がっている友人の姿は、人々の疎外感や孤独感を増幅させる。孤立する不安から、若者たちはますますSNSで友人とつながっていることを求め、SNSをますます利用時間する。結果として、孤独感が高まるほどSNSにはまり、SNSにはまるほど孤独感が高まる効果（螺旋状の増幅過程）に苦しむ若者は多い。

ここで、いじめ加害者の心理に注目しよう。森口朗氏は内藤朝雄氏の作ったいじめの発生メカニズムを次のように解釈している。人々は皆「無条件的な自己肯定感覚」に支えられて生きている。この支えが過度な否定的体験によって壊されると、強烈な精神的飢餓感が生じ、全能欲求が生まれる。その全能欲求を満たすのがいじめである。（『いじめの構造』（2007）、第3章）

以上のことから、SNSが孤独感増幅装置としての働き、この否定的体験および全能欲求の原因となり、ひいては、潜在的ないじめ加害者を生み出しているの可能性がある。

最後に、SNSを通じたコミュニケーションに着目したい。森口朗氏は『いじめの構造』（2007）において、コミュニケーション能力とは以下の3つの要素から構成されていると定義した。それは「自己主張力」、「同調力」、「共感力」である。この3つの力の総合力が、スクールカーストを形成しており、高いほど人気者に、低いほど仲間はずれにされる傾向にある。

それでは、SNS上でのコミュニケーションにおける3つの要素の表れ方について見てみよう。ジョージ・ハーバード・ミルは、コミュニケーションを、①今自分がどのように見られているか「その場にふさわしい振る舞いとは何か」を想像し、演じる→②周囲の反応をモニタリングして、想像通りの反応が得られなければ適宜修正する、というプロセスから成ると定義した。しかし、どこまで修正すれば相手の期待と一致するかを示す明確な指標はない。したがって、我々は自分とは何か、相手にどう思われているかが分からないという煩悶に悩まされてしまうのだ。特に伝達媒体が文字に限られているSNSでは顕著である（鈴木謙介氏「ウェブ社会のゆくえ」（2011）、第2章2「ソーシャル疲れの社会学」）。鈴木健介氏は同書において、若者たちはSNS上で「自分らしさはこうですよ」という一貫した自己像を演出し、この煩悶を拭おうとしているのではないかと推測している。すなわち、結果としてSNS上では「自己主張力」が拡大していると言えよう。

また、ラルフ・リントンはコミュニケーションを、①他者からの期待をうける→②自分に役割が生じる→③役割を全うする→④他者からの承認を得る、というプロセスによって説明している。しかし、文字媒体のみでは、他者からの期待が読み取りづらい。またSNSは、即時多発的なコミュニケーションであり、同時に多数の世界がつながることがある。すなわち、異

なる多数の期待を同時に寄せられることがあるのだ。したがって、SNS 上では他者からの期待に応えることが難しく、結果として「同調力」、「共感力」が縮小してしまいやすいと言える。

ここで森口朗氏が『いじめの構造』（2007）において作成した表を見てみよう（表 1）。自己主張力が高く、共感力、同調力が低いものは、被害者リスクが高いのである。

表 1 コミュニケーション能力からみる人間関係

			同調力		
			高い	低い	
自己主張力	高い	共感力	高い	スーパーリーダー	栄光ある孤立
			低い	残酷なリーダー いじめの首謀者	「自己中」 被害者リスク大
	低い	共感力	高い	人望あるサブリーダー	「いい奴なんだけど…」 被害者リスク中
			低い	お調子者 いじられキャラ いじめ脇役候補	「何を考えているんだか…」 被害者リスク大

以上 3 点のことから、SNS の接続性、孤独増幅性、コミュニケーション不全性といったさまざまな特徴がいじめを助長させている可能性があることが分かるだろう。

第 2 章 学校現場における SNS といじめの実際的な結びつき

1. 調査の目的

第 1 章では、SNS がいじめを助長させるツールである可能性を示した。しかし、いじめの認識基準が設定されていないため、学校現場において SNS がいじめ問題にどれほど影響しているのか分からない。したがって、アンケート調査をとることで、ネットいじめがどれほど深刻に認識されているのか、SNS をつかったいじめと学校でのいじめの間に認識の乖離があるのかを調査する。

2. 調査方法について

SNS をつかったいじめと学校でのいじめの認識度の差を調べるため、同クラスの中学 1 年生 31 人を対象に、以下のような 10 項目についてのアンケートを行った（図 1）。項目については平成 23 年度版情報通信白書の「ネットいじめの被害経験と学校でのいじめの被害経験（中学生：上位 5 件）」（図 2）を参考に、主に SNS をつかって行われるいじめを 5 項目、学校でのいじめを 5 項目、作った。なお、図 2 の項目「誰のものか分からないアドレスから、悪口を送信された」は、匿名性の低い SNS についての調査という趣旨に合わないため、同じく平成 23 年度版情報通信白書の「中学生のネットいじめの加害経験」における「A さんをグル

ープチャットからはずそうなどと呼びかけた」という項目を参考に、変更した。

質問項目	評価			
	いじめではない	いじめと言えなくもない	いじめである	深刻ないじめである
学校で、知っている人たちから悪口を言われた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ネット上でからかわれた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ネット上に事実とは異なる自分の情報を書き込まれた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学校で、大勢から腹が立つことを言われた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
自分にだけメールが来なかった	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学校で、本当はしていないことを、したと言われて、自分のせいにされた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
グループチャットで仲間はずれにされた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学校でからかわれた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ネット上で危ない目にあわせると言われた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学校で大勢から恥ずかしい思いをするようなことを言われた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

図 1 アンケートに用いた 10 項目

「いじめではない」を 1 ポイント、「いじめと言えなくもない」を 2 ポイント、「いじめである」を 3 ポイント、「深刻ないじめである」を 4 ポイントとし、各項目の平均ポイントを集計した。

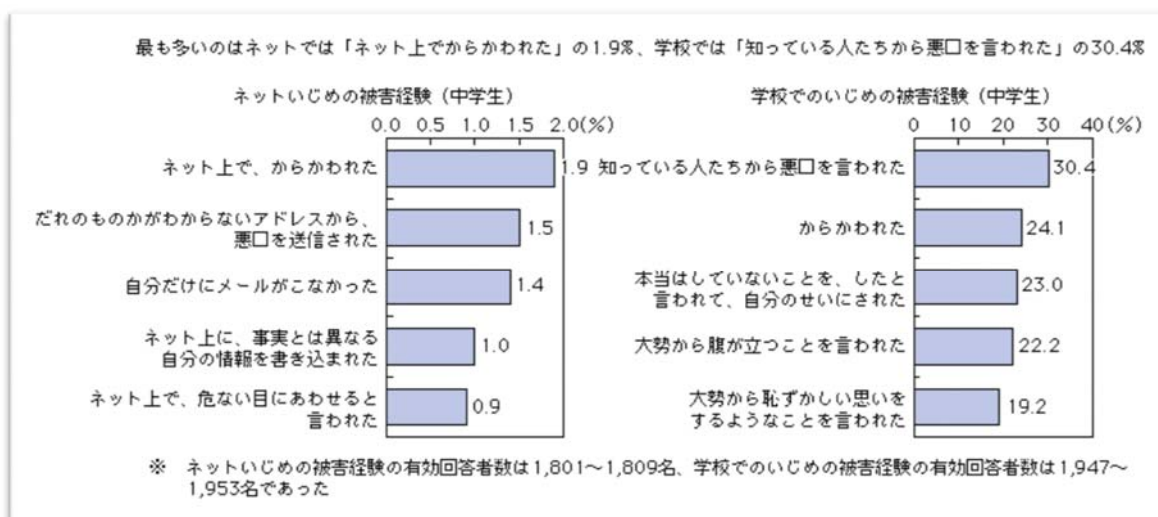


図 2 ネットいじめの被害経験と学校でのいじめの被害経験 (中学生: 上位 5 件)

出典『平成 23 年度版情報通信白書』「ネットいじめの被害経験と学校でのいじめの被害経験 (中学生: 上位 5 件)」

3. 調査結果

まず、中学生の SNS 利用率については、SNS を利用している中学生は 65% (20 人)、利用していない中学生は 35% (11 人)、と多くの中学生にとって SNS は主要なコミュニケーションツールと言えることが分かった。

次に、「SNS を使ったいじめ」と「学校でのいじめ」の間に認識度について見ていく。

各項目の平均ポイントは以下のものであり (図 3)、SNS、学校別の平均ポイントは、SNS をつかったいじめが 2.56 ポイント、学校でのいじめが 2.30 ポイントである (図 4)。以上のことから、SNS をつかったいじめのほうが僅かに重要視されていることが分かった。

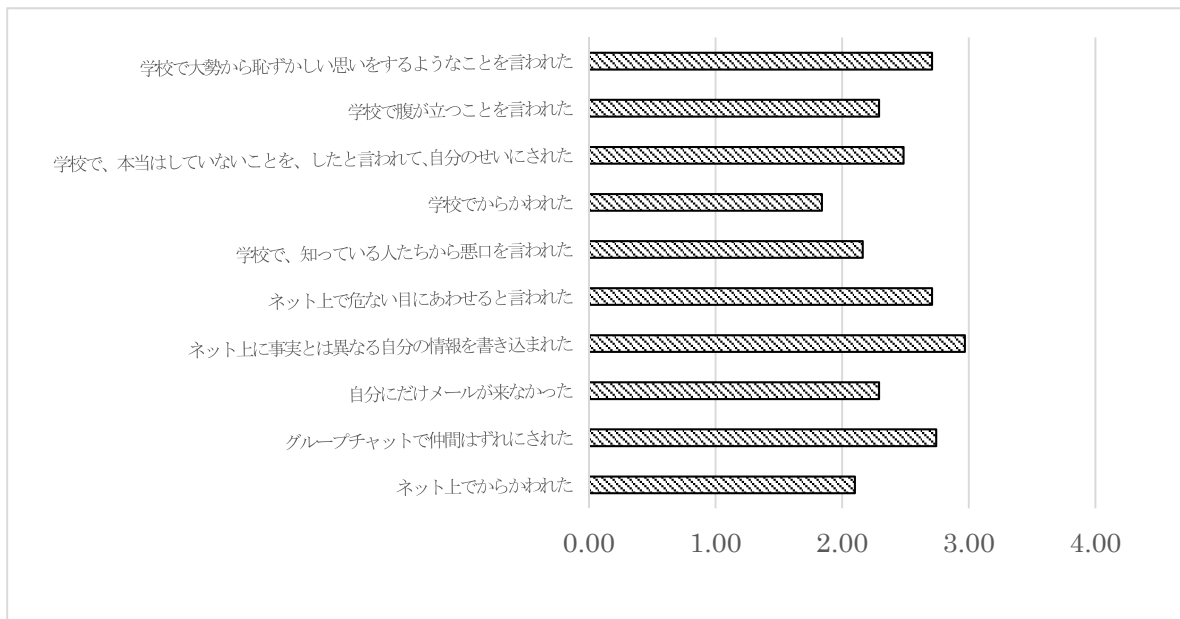


図 3 各項目の平均ポイント

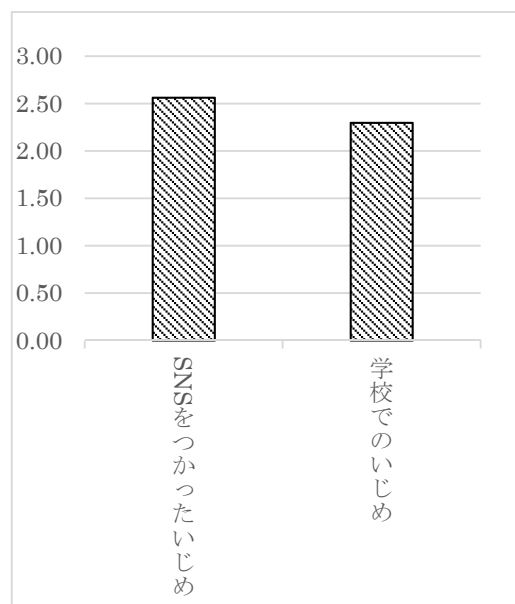


図 4 SNS と学校におけるいじめの平均ポイント

特にこの傾向を顕著に表しているのが図5だ。SNS利用の有無にかかわらず、学校でからかわれることよりも、ネット上でからかわれることの方が、深刻ないじめだと捉えているようだ。

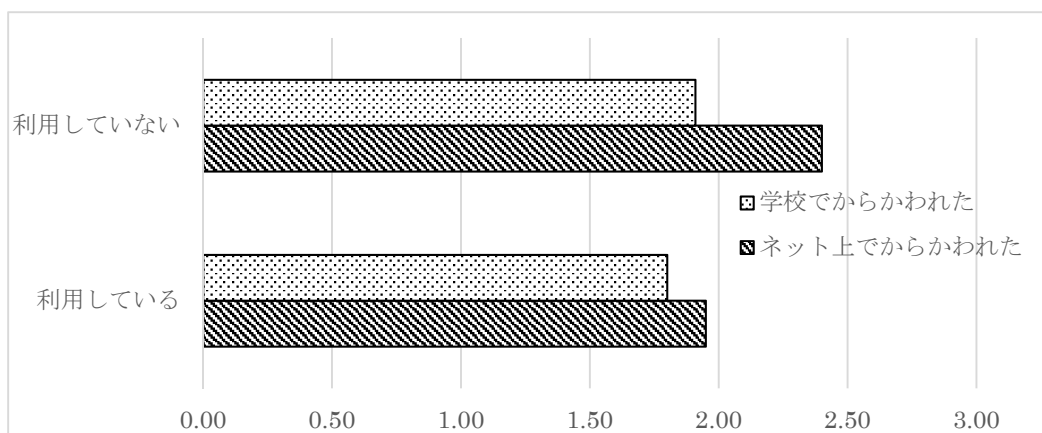


図5 ネットと学校における違い

では、SNS利用の有無によって、「SNSをつかったいじめ」と「学校でのいじめ」の認識の違いはあるのだろうか。

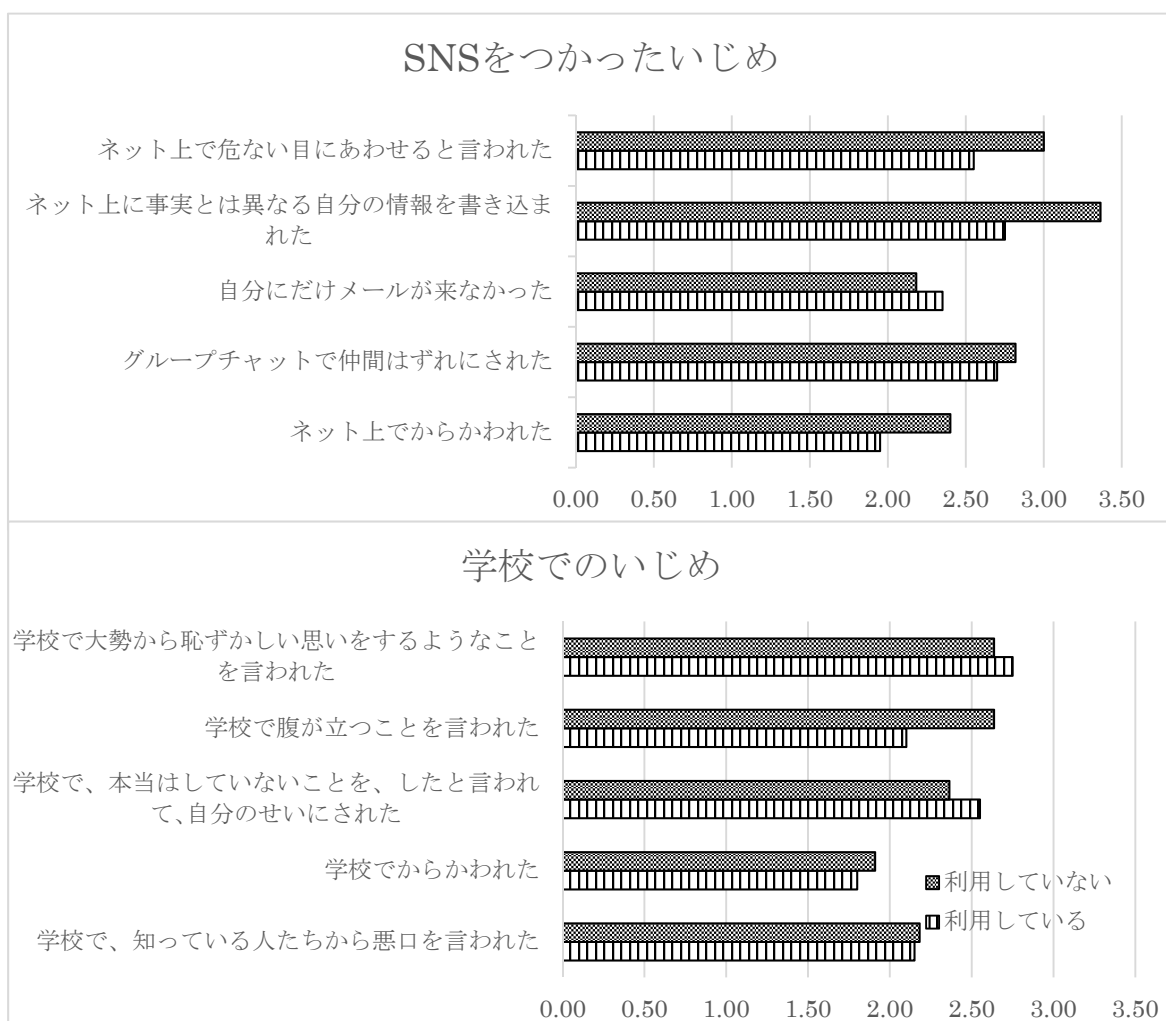


図6 SNSを使ったいじめと学校でのいじめ

図6より、SNS を利用していない中学生の方が、SNS を利用している中学生よりも、SNS をつかったいじめについてのポイントが高い。一方、「学校でのいじめ」については両者の顕著な差が見られなかった。また、先に挙げた図5でもこのような傾向が見られる。以上のことから、SNS を利用していない中学生の方が、「SNS をつかったいじめ」を深刻に捉えていることが分かる。

自由記載によって中学生が何をいじめと見なすかを調べたところ、「暴力」「ものを隠される」などの「学校でのいじめ」が10件あった。一方「SNS をつかったいじめ」については、「変な写真を載せられる」が1件あったのみである。

4. 考察

以上を踏まえると、次のようなことが推測される。

SNS の爆発的な広がり、それに伴ういじめが問題視されて以来、学校でもその危険性と正しい利用が教えられてきた。そのため、図4、図5で表れたように「SNS をつかったいじめ」は、中学生の間でも深刻な問題だと捉えられている。しかし、自由記載で SNS をつかったいじめがあまり挙げられなかったことから、実際のいじめ現場に、「SNS をつかったいじめ」はあまり登場していないことがうかがえる。SNS 利用者はこのことを実感しているのだろう。一方 SNS 非利用者はその実情を知らない、図5で表れたように、SNS 利用者よりも、SNS の危険なイメージが膨らんでしまい、その認識度が高くなっているのではないだろうか。

「SNS によるいじめ」の方が「学校でのいじめ」よりも深刻に認識されていた理由についても、同様のことが言えると考えられる。森口朗氏は『いじめの構造』(2007)で、「学校いじめにおける恒常的な被害者と恒常的な加害者は一部である。」と述べている。したがって、多くの生徒は実際のいじめ現場をあまり知らない。ゆえに、近年の風潮としてより重要視されている、SNS をつかったいじめをより深刻に捉えたのではないだろうか。

まとめ

第1章より、SNS におけるコミュニケーションは、リアルなもの比べいくつかが劣っている点がある。たとえば、バーチャルの世界でいつも繋がっているため、コミュニケーションがいつはじまるか分からないという拘束性や、他人が盛り上がっている様子が流れ込むことによる孤独感、意志伝達手段が文字に限られるという不全性などだ。それにもかかわらず、若者たちは SNS の性能に信頼を置きすぎるあまり、リアルの世界でコミュニケーションに代替するものとして SNS を使っているようだ。だからこそ、コミュニケーションのすれ違いが生じ、悩まされてしまう。このような点で、SNS といじめは潜在的につながっているといえる。したがって、SNS の欠点を知り、SNS とリアルなコミュニケーションを使い分けることが大切だと考える。

一方で、第2章より、実際のいじめ現場に SNS をつかったいじめはあまり登場していない

ようだ。SNS いじめが重要視されて以来、その危険なイメージがやや肥大しているように感じられる。すなわち、SNS はいじめ問題に発展する可能性があるものの、実際のいじめ現場に台頭するほどの大きな危険性は有していない、というのが私の結論である。しかし、これから、SNS いじめが学校現場にたくさん現れる可能性は大いにあり、議論を深めることは重要であろう。また、SNS を使っていない生徒のほうが SNS を深刻に認識している点について、危険なイメージの肥大化が原因だと述べた。しかし、危険だと感じているからこそ、SNS を利用していない可能性については考慮できていないので、さらなる調査が必要だと感じた。

参考文献

- ・鈴木謙介著「ウェブ社会のゆくえ 多孔化した現実のなかで」 NHK 出版、2013 年
- ・原清治、山内乾史編「ネットいじめはなぜ「痛い」のか」 ミネルヴァ書房、2011 年
- ・総務省『平成 23 年度版情報通信白書』、2011 年
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h23/html/nc221310.html>、閲覧日 2016/12/30
- ・総務省『平成 27 年度版情報通信白書』 2015 年
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc242220.html>、閲覧日 2016/12/30
- ・森口朗著『いじめの構造』、新潮社、2007 年